

トスキナア

石崎一正戯曲集

トスキナ

石崎一正戯曲集

江苏工业学院图书馆
藏书章

石崎一正戯曲集

トスキナア

一九九七年九月二十六日 第一刷発行

著 者 〳 石崎一正

発行者 〳 利光哲夫 ©

発行所 〳 株式会社テアトロ

東京都千代田区猿樂町二ノ三ノ一 郵便番号 101

電話番号 (〇三) 三三九四一七七九

振替 〇〇一〇・一、一九九六八

印刷所 〳 新栄堂

製本 〳 協栄製本

● 定価は表紙カバーにあります。

目次

夏 蟲 5

野辺山恋し 55

ロダンと花子 153

トスキナア 一九二〇年代大正挽歌 239

年譜 327

「あとがき」にかえて 木口和夫 331

石崎一正戲曲集

夏

蟲

二

幕

その一

東京近県のある村。

夏の夜更けた頃。

貧しい農家。上手に土間（正面の板戸が一枚あけられ、月の光が射し込む。隅に風呂桶、釜土）土間に続いて板間。その奥の居間に蚊帳が吊つてある。板間の管制カバーに遮蔽された電灯の光の下で、葉山（二十三。坊主頭。階級章のはがされた軍服）が毛布を丸めたやつを枕にして、仰向けにひっくりかえっている。かなり酔っている態。戸外にすだく虫の音――。

葉山（女の声をまねて）うちはもう寝てしまつたのよ。こんな――。クイッ！ 夜更けになつて困つたわよ。いきなりどんどん戸を叩くんですもの、他の兵隊さんだつたら追い返してやつたわ。へへへッ――クイッ！ いやだわ。いやだわよ。へへへッ。（大きな声で）巴枝さん！ 巴枝さん！ クイッ！……巴枝さん！（起き上る）

巴枝（二十五。しどけなき寝巻姿。コップを持ち、静かに戸口に現われる。ちよつと顔をしかめて）駄目よ……。葉山さん！ そんな大きな声をたてて――はい。お水。

葉山（にやにやしながら）え？ ああ……（渡されたコップの水を一息に飲む）フム……。

巴枝 止つた？ しゃっくり……。葉山さんたら、ほんとに困るわ。こんな遅くなつて。

葉山 へへッ。毛布をね、持つて来たんですよ。いつか、おばさんが欲しそうな事言つてたから、だからさ。

巴枝 そりゃあ、ありがたいのよ。けど――（毛布を目にやりながら）大丈夫なのかしら、軍隊

のもののなんか持ち出して？

葉山 俺だけじゃねえよ。被服の准尉なんかいい事にしやがって、こつそり民家へ運び出して
いやがるのさ。部隊長の野郎、堂々とトラックに積みこみやがって、俺りあ知ってるよ。
フツ。ありあ皆インチキなのさチエツ！ いいじゃねえか。そんな事。糞面白くもねえ。

巴枝 ……でも、そんなに酔って、兵舎に帰ったらどうなるの？ 何処でそんなに飲んだのよ。
いけないわ。

葉山 へへッ。俺りあ、炊事の倉庫に忍びこんで、元氣酒を一箱かつぱらってやったのさ。班
長に頼まれたんで、仕方がねえから最後の命令だと思って聞いてやったのさ。

巴枝 まあ！ いくら班長さんの命令だって、そんなしてつかまったら、どうなるの……。
(小声で) 葉山さん、急に人が違ったようになって——ねえ！ もう遅いのよ。心配だわ。

葉山 なにが？

巴枝 いえ、葉山さんの事が——いくら戦争に負けたからって、まだ兵隊さんよ。

葉山 チエツ！ 俺たちあもう奴隷じゃねえんだ。ああ、あ……。 (寝ころぶ)

巴枝 (小声で) すっかり乱暴な言葉づかいになって—— (困りながら) ねえ！ ほんとにあた
し、寝ていたのよ。それに今晚はおつかさんも居ないし……。

葉山 寝てるんなら、おばさんも起きてくりあいんだ。

巴枝 そうじゃないのよ。葉山さん酔ってるもんだからすぐ忘れて——おつかさんは出かけて
いるのよ。町の知っている人の所へお通夜に呼ばれて——。

葉山 誰？

巴枝 いえ、葉山さんの知らない人。

葉山 (むっくり起き上って) 巴枝さんひとりなの？ クイツ！

巴枝 そうよ。あら！ またしゃっくり？

葉山 (薄笑いしながら、物入れから、鼻紙を出してよりをつくりはじめる)

巴枝 お水持つてくる？

葉山 へへッ。いらねえや…… (こよりを鼻穴にさしこみ、しゃっくりを止めようとして続け様に大
きなくしゃみ) フェッ！

巴枝 フフッ。止つたの？ そんなして？

葉山 フウ——。

巴枝 葉山さんたら、手ばなもかむし……。

葉山 ……。(思いついた様子で毛布をひろげはじめる。中に元氣酒のビン)

巴枝 ……？

葉山 (ビンを取り、口で栓をあけようとするが仲々あかない)

巴枝 あ！ 危ないわ。栓ぬきならあるからそんな—— (座敷に上る)

葉山 そんなものなくなつて—— (ガチッと歯であけてコップに注ぐ) 巴枝さんも飲めば、あめ
えんだぜ。

巴枝 何に？ あら！ 駄目よ。

葉山 飲めよ。

巴枝 お酒じゃないの。ねえ！ 葉山さんだつてそんなに酔つて、それ以上毒だわ。

葉山 少しだけさ。

巴枝 いやよ！

葉山 どうして。

巴枝 葉山さんはほんとうに早く帰った方がいいわ。（奥の部屋に行き急いでもんべをはく）

葉山 チェッ！ 強情だなあ。（ひとりで飲みながら）軍規も軍律もそんなもんはありあしねえよ。ウム？

この時急に戸外で、ガランガランとバケツの蹴とばされたような音。あたりの静寂を破って異様な間。

葉山 なんでえ！ ヘッ。驚かしやがら。（新兵特有の怖気から、やがてふてぶてしい構えになって、ゆっくり戸口へより外をうかがう。遠くで野卑な笑声）

巴枝 （びっくりして出て来て）何に、どうしたの？ いやだわ。昨日も夜中に変な音がしたわ。
葉山 あいつら、へへッ。何んでもないですよ。古い兵隊の奴あ、夜になるとそこそそなくなりあがつて、みんな娘の居そうな民家へ行っちゃあ遊んでいるのさ。新兵だけ、あんな森の中の三角兵舎に入るときあがつて、今度ここへ来やがったら、古参兵だろうと見習士官だろうと、反対にこっちで気合いを入れてやるんだ！（板間に戻り、酒をあおりながら）——俺たちあ、いざとなったら逃げ出すだけさ。自動車手の奴ら、運転出来るもんだから、五人も一ぺんにぐるになつて、夜中にトラックで逃げ出しあがつた。フン！ 何も慌てるにあ及ばなねえんだ。（自分のコップを巴枝に渡そうとして）ちよつと飲んでみりあいんだよ。なんでえ、どうしたんだよ。変な顔して、しわがよっちゃまうぜ。いやらなっちゃうなあ。

巴枝 ……。

葉山 ねえ。へへッ。心配しなくなつて大丈夫さ、あいつら、只のぞいてっただけさ。

巴枝 ……（考えこむ様子）

葉山 ねえ。あめえんだよ。これ——。

巴枝 （静かに）運がよかったのねえ。

葉山 ええ？

巴枝 内地の兵隊さんは——。

葉山 何にが？

巴枝 同じ兵隊さんでも、外地や第一線の人に比べると——。

葉山 どうして……。俺りあ、いっそ外地の方がよかったと思つてゐる位だ。新兵なんて何処

にいても同じさ。どうせ同じなら官費旅行のつもりで、南方あたりの——（思いついて）

……そうか……巴枝さんの御主人だつて、その内にあ帰つてくるんだろう。

巴枝 ……。うちは駄目だわ。

葉山 だつて、まだはつきりわからねえんだろう。大丈夫さ。

巴枝 ……。

葉山 ……。

巴枝 もう、あきらめているの。（間）

葉山 飲めよ、考えたつてどうつて事あねえや。俺たちだつて、下手すりあ虫けらみてえに殺されちまつていたんだ。ヘン！

巴枝 ……。

葉山（うんざりして）飲まねえならいいよ。迷惑なんだろうな。迷惑ならいいさ。チエッ！
みんな方々の民家へ行つてゐるんだ。

巴枝 え？ あら！ そうじゃないのよ。ただ、あたし、お酒なんて飲んだ事ないのよ。

葉山 いいさ。いいですよ。

巴枝 だつて——意地悪ねえ、葉山さんは怒ったりして。（立つて、戸棚からコップを取り出す）

葉山（にやにやして）飲みあいのさ。日本つて国はまだこうしてあらあ。海ん中へ消えちまうわけでなしよ。

巴枝（ごとごと戸棚を探していたが、ふり返つて）え？ なんにもお肴になるようなものがなくて——あら！ そんなに、駄目よ。駄目だつてば——まあ！ 飲めないわ。こんなに。

葉山 平気さ。

巴枝 葉山さんは平気だつてあたしは——さつきから飲ませよう、飲ませようとして——（それでも、ちよつと一口飲んで）ほんと！ 甘いのねえ。

葉山 ヘヘッ。そうさ。ぐうと飲んじまえば。

巴枝 いやだわ。めずらしそうに人の顔ばかり見て——。

葉山（うるたえて）え？ ヘヘッ。俺たちあ飛行機をずらつと並べといて、片っぱしから鉄槌でぶちこわしてやつたんだ。どうせがたの故障機ばかりさ。満足に空を飛ぶような飛行機なんて、日本にあ一機もありあしねえんだ。それから、滑油を飛行場の真中にぶちまけてやつたんだ。泥々の油海さ。

巴枝 (むせて咳をする) ああ、もう沢山だわ。クフン。あたし赤くなつたでしょ？

葉山 (まぶしそうに) え？ まだ普通さ。

巴枝 そう。でもほてつて来たわ。(団扇をとつて扇ぐ) まあ、お酒の匂いがするもんだから、

こんなに蚊がよつて来て……。

葉山 おばさんは帰つて来ないの？

巴枝 そうよ。どうして？

葉山 ほんとにうるせえ蚊だなあ。

巴枝 (扇ぎながら) おつかさんも気の毒だわ。

葉山 巴枝さんはどうなんだい？

巴枝 え？ あたしはいいのよ。あたしなんかこの家へ来る前から、親も兄弟もないひとり

きりだつたんですもの。(間)——葉山さん。農政局つて知ってる？ 農林省の。

葉山 知らねえな。俺りあ仕上げ工だもん。

巴枝 そう……。フツ。とてもコーヒーの好きな人だつたわ。お役所の帰りにはいつもき

まつて飲んでいくの。

葉山 何に？

巴枝 え？ フツ。うちのひと。

葉山 なんでえ、そうか。

巴枝 夏のビル街つてお昼の三時頃になると急にしんとしてしまう事があつたわ。あたしがおつとめしていた頃の事なの。四時になると、通りは帰る人でいっぱいになつて駅迄続いてい

たわ。

葉山（酒をついで飲む）

巴枝 おとなしくて、葉山さんみたいにお酒は飲まなかったわ。

葉山 チェッ！ だらしがねえんだなあ。

巴枝 だけど、胃が悪くて、いつもお腹がぐうぐうなっていたわ。

葉山 腹がへつっていたのさ！

巴枝（急に立ち上がって土間に下りる）

葉山（おどろいて）巴枝さんどうしたの！

巴枝（ふりむかず）何んでもないわ。何んでもないのよ。（慌てて目頭をぬぐい）あたしすこし

酔ったのかしら。（外に消える）

葉山（小声で歌い出す）

俺が死んだと聞いたなら、

泣いてくれるな、これお前。

白木の箱が届いたら、抱いておくれよ。

ああ、想い出に……。

巴枝（静かに入ってきて来る）

葉山 フーム。ヘヘッ。俺りあもう、会社だろうと何処だろうと、人の下になって、号令で使われるのはこりごりだ。ひとりだけでやってやるんだ。ねえ、巴枝さん。俺りあ考えているんだ。やすり仕上げの方で、下うけ工場なんか——はじめの内は小っちゃい奴でいいんだ。

その内にあ、仲間も集めて――。

巴枝 葉山さん。本気でそれ――。

葉山 俺りあ、いつも考えていたんだ。そうつとひよ子を抱くみたいにさ。どんなに辛い時でも、少しずつ考えていたんだ。

巴枝 だけどあたしの行つてゐる工場は閉鎖になると言うのよ。せつかく行き始めたのに。

葉山 だからどうなんだい。

巴枝 葉山さんみたいないな人、これから心配だわ。でも、疎開してゐるって言うお父さんの所へ帰るんでしよう。一応でも……。

葉山 冗談じゃねえや！ 他の親なんか、北海道の果てからだって、四日も五日もかかってわざわざ面会に来てゐるんだ。それを、フン。どうせ血のつながらねえ義理だけさ。親爺の奴あ、自分の本当のがきを可愛がつてりあそれでいいのさ。

巴枝 でも葉山さんのお父さんだつてきつと……。

葉山 いいのよ。チェツ！ 子供の時から友達だつて、龍泉寺へ行きあ大勢居るんだ。なに
も親爺のそこへなぞ行くかつてんだ。

巴枝 葉山さんお母さんが居なかつたのねえ。

葉山 いいよ、もう。死んだおふくろを想ひ出して泣いたりしたのは、奴隷だった時さ。何んと言つたつて娑婆さ。軍隊みてえな地獄じゃねえんだ。――七色唐芥子屋の親爺が、いつも頭痛膏を貼りあがつて、ねむそうな顔を出して、――女の子が月見草を、こう大事そうにかかえて、人ごみをさけて行くんだ。金魚屋のところは、いつも青い電気がついていて、そこ